

全 第二年 佐藤 榮三郎  
 全 第四年 白濱 徵  
 彫刻科第二年 菅原 大三郎  
 彫金科第四年 飯田 仁三郎  
 全 全 酒井 利之助  
 蔦絵科第四年 内藤 源太郎

本年中本校絵画科卒業生ニシテ尋常師範學校及尋常中學校高等女學校圖画科教員免許狀ヲ受領セシモノ十人アリ又生徒ノ願ニ依リ在學證明書ヲ下付シタルモノ五十四人アリ

本年中退學生ニ復校ヲ許セシモノ一人規則第十九條ニ依リ停學ヲ命セシモノ一人除名セシモノ一人其他疾病事故等ニ依リ退學ヲ許可セシモノ十九人アリ

(歳出・歳入、所有物件等に関する項省略)

## 解説

### 1 楠公銅像木型

左記の記事は天覽の様子を詳しく伝えている。

○楠公ノ銅像 前号ニ記載シタル同木像ハ東京美術學校ノ高村光雲(楠公ノ体軀)後藤貞行(楠公ノ乗馬)ノ両氏カ擔任着手シ居リシガ去月十五日ヲ以テ全ク竣工シ(一昨年五月着手セシヨリ殆ト滿二年ニ及ヘルモ全ク從事セシハ十三ヶ月餘ナリシト)同月廿一日 兩陛下ノ天覽ヲ經タリ(木像ハ御車寄前ニ組立タリ)當日 陛下ニハ徳大寺侯爵以下十四五名ノ侍從ト宮城御車寄前ニ出御アリ岡倉美術學校長及高村後藤ノ両氏御前

ニ咫尺シ岡倉氏一々之カ説明ヲ申上ケシニ天顏殊ニ麗シク能ク出來タリトノ御賞辭アラセラレント承リヌ夫ヨリ皇后陛下モ女官七八名香川皇宮太夫ヲ從ハセラレ出御暫ク觀覽アリシガイト御感ノ御氣色ナリシ由ニ伺ハレタリト此木像ハ堅ハ馬ノ蹄ヨリ兜ノ上マテ一丈四尺横ハ馬首ヨリ尾筒ノ先迄一丈九尺人馬共ニ生ケルカ如ク殆ント叱陀奔逸セントスルノ狀アリト頓カテ銅製鑄造竣工セハ(來年三月迄ニ成功ノ見込)高サ二間ノ臺礎ノ上ニ建設スル手順ノ由扨天覽モ畢リタレハ近日文部大臣ノ見分濟次第上野公園内ナル同學校ニ於テ衆庶ノ縱覽ヲ許ス筈ナリト云フ

(『京都美術協會雜誌』第十一号。明治二十六年四月二十八日)

なお、天覽の際の様子については高村光雲の「木彫の楠公を 天覽に供えたはなし」(『高村光雲懷古談』昭和四十五年。新人物往来社。二八六―二八九頁)に詳しく記されている。また、竹内久一は「先帝陛下と神武天皇」(『書画骨董雜誌』第五十二号。大正元年九月)の中で

御所では私の技藝天はお玄關に備へ、楠公像の原型は突き當りのところへ安置しました、その内 陛下出御になり、最初楠公原型を御覽遊ばされ次に不肖の作に御眼をとめられました、私共も離れて拝見いたしましたので美術學校の校長後藤、高村光雲と私、山田鬼齋と云ふ順序に、遙か距つて差扣えて居りましたが、陛下には一々侍從長を通じてその都度校長へ御下問あり、最後に『あゝ綺麗である』と仰せられたる旨、校長より親しく承知いたしましたして、何と云ふ勿体ない有り難い仰せであるやら、覺えず汗を流した始末であります。

と述べており、当日は竹内久一作の伎芸天(シカゴ・コロンブス世界博覽

会出品。本学芸術資料館所蔵も天覧に供したことがわかる。

## 2 第一回卒業式

明治二十二年二月入学の第一期生で正規の課程了えた者のうち十六名が第一回卒業生として送り出された。科別の卒業者名、就職状況等については「生徒」の項に記載されている。卒業生中、藤岡注多良（六角紫水）は最初に母校教官となり、次いで岡本勝元、下村観山らも採用され、指導陣にも徐々に新陳代謝が行われ始めた。

## 3 岡倉校長の清国出張

宮内省から中国美術調査を目的とする出張を命ぜられた。七月十一日、壮行会が開かれ、同月十五日、岡倉校長は新橋を出発。早崎稷吉が随行し、同月二十八日、長崎出航、二十九日釜山着。それより仁川、天津、北京、開封、洛陽、龍門石窟、西安、成都、重慶、漢口、上海を巡り、十二月六日、神戸着。翌七日、新橋に着き、本校生全員の出迎えを受けた。無事帰国を祝い、彫刻科教官たちは寄せ彫りの木盤を岡倉に贈った。翌二十七年二月二十五日、大日本教育会と東邦協会の共催による講演会が開かれ、岡倉は「支那の美術」を講演。その筆記録は『大日本教育会雑誌』百四十三号、『東邦協会報告』第三十五号、『錦巷雜綴』創刊号その他に掲載され、広く紹介された。また、岡倉は「支那南北ノ区別」(『国華』第五十四号)も執筆し、ほかに旅行日誌なども遺している。

## 4 岡崎雪声の渡米

楠公銅像鑄造主任の雪声は鑄造法研究のために渡米した。この件については次のような雪声の談話が遺されている。

### 楠公馬上の銅像

岡崎雪聲 君談

丁度明治二十三年の事で御座いました、伊豫の國は別子銅山、開鑛二百年の記念祭と御座いまして持主の住友吉左衛門氏が、同山産出の銅を以て、何か大なる銅像を建て、千歳の紀念に致して、是を宮内省に献納しやうと言ふ事で、其圖案を東京美術學校に依頼致しましたる所が、同校では「楠公馬上の銅像」を選定して、木型彫刻は高村光雲、山田鬼齋、後藤貞行の三氏が擔當せられ、私は其を鑄造することゝなつて、同年四月に同校に奉職する事となつたので御座います。

偕でドンナ風に鑄造したらば善いものか、私は色々考へましたが、中々名案が出ませぬ。そも／＼日本には太古より鑄造術があつて、奈良や鎌倉の大佛のやうな大なるものも今に傳つて居りますが此等は大概は座像であつて、附屬品といふものも甚だ少なう御座います。それで其鑄造法は、登り鑄と唱へまして、下から段々に鑄上げるのでありまして、此他諸所の神社佛閣にも燈籠とか鳥居とか種々ありますが、皆部分々々を別けて鑄造して是を積み上げた者で御座います。

所で楠公の銅像は長一丈五尺、幅五尺五寸、高さ一尺五寸の長方形臺座の上に騎馬の姿である、又楠公は丈八尺の人物で甲冑を着けて居りますから、前立、袖、草摺、總角、大刀、手綱等の附屬物が多う御座いますから、トても全身鑄に致す事が出来ない。さりとて傳來の取附法では完全を望む事が出来ない。此等の事で日夜苦心致しましたが、中々好い方法も考へられませなんだ。

折柄明治廿六年には米國シカゴに世界大博覽會が開かれまして、美術工藝部は世界が競争して出品すると言ふ事でありまして、是は一つ歐米の鑄造法を見たならば、又好い工夫も出やうと思ひまして、幸ひ夏期休

業の時でありましたから、長官にお暇を願ふて、北米に渡航致しました。

サア會場に這入つて見ますと、一丈以上の銅像は何十點となく列んで居りまして、何れも皆丸鑄としか見れないから驚嘆致しました。それから毎日の様に其處に行つて、撫で、見ね許りに研究致しましたが、ドウも取纏めたといふ所が見付からず洵に不思議な位でしたが、或日の事紐育鑄造會社の出品ワシントンの銅像一丈五尺といふのが、隋圓形臺座に立ち、片手に國旗を持つ居て、其臺座の枕木を以て一尺程から上げてありました。其日は丁度天氣が好くて、窓より挿し込む光線が地面に反射して、臺座の裏面を照しましたから、熟々見ると、經七尺許の臺座は六部に別れ、其銅像も裏面より見ると、繼ぎ目か微かに解りました。それから立像を研究して見ますと、成程繼目が微かながらに見江る。是で漸く安堵の思をして旅宿に歸つて、他日東京組合金品總代の小林倉次郎氏に誘はれて、シカゴ鑄銅會社に參り、目前に鑄造法を實驗して大に利する所がありました。

歸朝後は愈よ桶公銅像の鑄造に着手して、漸くに纏め上げることか出來ました。でご座いますから、此銅像は、日本古來の鑄造法と、米國に於て新に得たる法とを折衷致して鑄き上げましたもので、兜、兩袖、草摺、大刀、手綱等は皆別々に拵へて、是は大概日本固有の法で取付け、馬は胴と頭と四足と、尾と都合七つに別けて鑄造し、是は洋法で以て取り付けました。ですから外から見ましては繼目が容易に見江ず、寧ろ全身鑄としか見えませぬ。

〔『日本美術』第十六号。明治三十三年二月〕

